参考　つれづれなるままに（序段）

要旨

暇に任せて、とりとめもないことを心のままに書きつけていると、妙に落ち着かない気分になる。

構成

全文一段落。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①つれづれなる（形動ナリ・体）　まま　に、（格助・状態）　日暮（ひく）らし（副）　硯（すずり）　に（格助・対象）　向（む）かひ（ハ四・用）　て、（接助・単接）　心（こころ）
に（格助・場所）　うつりゆく（カ四・体）　よしなしごと　を、（格助・対象）　そこはかとなく（形ク・用）　書（か）きつくれ（カ下二・已）　ば、（接助・順偶）
あやしう（形シク・用・（ウ音））　こそ（係助・強意（係））　ものぐるほしけれ。（形シク・已（結））

①しなければならないこともなく手持ちぶさたなのにまかせて、一日中すずりに向かって、心に（浮かんでは消えて）移り変わっていくとりとめのないことを、何ということもなく書きつけると、妙に感興が湧いてきて抑えがたいほど気持ちが高ぶってくることだ。

指導上の注意点と発問例

●三八ページ

問　この一文の構成はどのようになっているか。

答「つれづれなるままに」「日暮らし」「硯に向かひて」「心にうつりゆくよしなしごとを」「そこはかとなく」の各部分が「書きつくれば」に掛かっていく。その全部が確定条件として、「ものぐるほしけれ」を導いている。「あやしうこそ」は「ものぐるほし」を修飾している。

補「書きつくれば」に掛かる部分は順に「執筆動機」「執筆場所」「執筆対象」「執筆態度」を示していると言われる。「徒然草」の成立について、説明することができる。

問　この一文を暗唱してみよう。

補すでに中学校などでこの部分の暗唱を経験している者もいるかもしれない。人口に膾炙した名文であるので、そのような生徒も含めて今一度暗唱させたい。全体の意味は文の構成を中心に図示する程度にして、細かい意味にあまりこだわらず、とにかく覚えさせたいものである。

問　この序段について、次の問いに答えなさい。

(ア)「徒然草」執筆の動機となった心境を表す語句を抜き出しなさい。

(イ)「徒然草」の内容・題材となっている対象は何だと言っていますか。本文中から抜き出しなさい。

(ウ)執筆の態度を表す語句を抜き出しなさい。

(エ)作者の感想を本文中から抜き出しなさい。

答(ア)つれづれなるままに

(イ)心にうつりゆくよしなしごと

(ウ)そこはかとなく

(エ)あやしうこそものぐるほしけれ

問　この序段には、「徒然草」執筆における次の事柄が述べてある。それぞれに該当する部分を本文中から抜き出しなさい。

(1)動機（執筆動機となった心境）

(2)内容（執筆の対象）

(3)態度（執筆の態度）

(4)感想（執筆時もしくは執筆後の感想）

答(1)つれづれなるままに

(2)心にうつりゆくよしなしごと

(3)そこはかとなく

(4)あやしうこそものぐるほしけれ

問　「心にうつりゆく」（10行目）の「うつりゆく」を(1)「移り行く」、(2)「映り行く」、の二通りに考え、それぞれの場合の意味を本文に即して述べなさい。

答(1)心に浮かんでは消え、消えては浮かんで、次々と交代して移り変わっていく　(2)次々と映像として立ち現れていく

問　「あやしうこそものぐるほしけれ。」（11行

語句の研究

●三八ページ

10つれづれなる　この語は、古来、さまざまな意味が考えられている。「徒然草」執筆の動機を説明しているという立場から、「しなければならないこともなく、暇で、手持ちぶさたな状態」の意とした。他に、「寂しい心情」「安らかな心情」「煩悩のある状態」などの説もある。ここでは形容動詞の連体形として用いられているが、「つれづれ」という名詞の形、「つれづれと」という副詞の形で用いられることもある。

10ままに　「…にまかせて、…に従って」の意。「まま」を形式名詞、「に」を格助詞としたが、「ままに」を一語と考え、形容動詞、副詞、副助詞とする説もある。

10心にうつりゆく　「うつりゆく」には、「移りゆく」と「映りゆく」の二説がある。「うつる」と「ゆく」の複合動詞の場合、ほとんどが「移りゆく」と解釈できる。しかし、ここでは上の「心に」には「映る」の意味で続き、「移り」「ゆく」と続いていくと考えるのがよいだろう。「心に映り、それが移り変わってゆく」。

目）の「あやしう」について、

A
[易]**「あやしう」のここでの意味を次の中から選びなさい。**

(ア)不思議に　(イ)珍しい　(ウ)疑わしい
(エ)気がかりだ　(オ)見苦しい

B
[易]**「あやし」には、①「不思議だ」②「珍しい」③「疑わしい」④「気がかりだ」⑤「見苦しい・粗末だ」などの意味がある。本文中の「あやしう」は、そのどれに当たりますか。**

答 A (ア)　B ①

問 **「ものぐるほしけれ。」（11行目）とあるが、それはどの程度の「ものぐるほしさ」ですか。**

答 「あやしう」と思うくらい。我ながら不思議だと思うくらい。

問 **「つれづれなるままに」（10行目）であることが、なぜ「あやしうこそものぐるほしけれ。」（11行目）という心境を生むのか、次の中から選びなさい。**

(ア)暇に任せて書くと、自分を見つめることにつながるから。
(イ)暇に任せて書いていると、来世に来た思いがあるから。
(ウ)世俗に心紛れずに書くことが、来世を直視することになるから。
(エ)世俗に心が紛れて書くことで、真実を直視できるから。
(オ)異常なほどに心が乱れて、現実を直視できないから。

答 (ア)

問 **この序段の末尾に「ものぐるほしけれ。」（11行目）とあるが、何がそうなのか、二通り考えてみよう。**

答 ・作者自身（の心）　・書き上がったもの

10よしなしごと　名詞「よし（由）」＋形容詞「なし（無し）」＋名詞「ごと（事）」が一語の名詞となったもの。「特に訳もないこと、とりとめのないこと」の意。

11そこはかとなく　ここでは、「決まった形式で書いているのではない」という作者の執筆態度の説明になっている。

11ものぐるほしけれ　「ものぐるほし」の意味は「狂ほし」に引かれて、「狂気じみている」という強い意味を採る説もあるが、ここではそのような意味ではなく、「妙に感興が湧いて、抑えがたいほど気持ちが高ぶってくる」くらいの意味であろう。また、ここの主語にも、「作者自身の心」とする説と「書き上がった物」とする説とがある。「ものぐるほし」が人の動作・状態を多く示すこと、「書きつくれば」から続いていることを考え併せて、前者で解釈したが、後者なら、このような妙な文章ができたという意で、謙遜の気持ちを表したものになる。また、前者の場合でも、正常な気持ちでいられなくなるという意味で、一応自分や自分が書いたものに対する謙遜の気持ちを含んだものと言えよう。なお、「こそ」の結びで、已然形となっている。

鑑賞

この序段は随筆という文章の成立条件をあますところなく伝えたものとして、評価の高いものである。短いながらも、歯切れが良く、古来、親しまれてきた名文である。ぜひ、暗唱させて、生徒の心にとどめさせたいものである。

ところで、「あやしうこそものぐるほしけれ」という末尾の部分については、十分に読み味わわせておきたい。これはもちろん、自分が書いた作品に対する謙遜の言葉でもあるだろう。しかし、「ものぐるほし」とは言いながら、自分の作品を冷静に見つめることができなければ、このような書き方はできないのではないだろうか。「徒然草」を読んでいると、しばしば作者の人を見る目の確かさに驚かされる。しかし、それは同時に自分を見つめる目の確かさにも通じるのであろう。それだからこそ、この部分に強い意味を求める必要はないように思う。熱中していることの合間にふと自分を見つめてみたときに浮かび上がってきた気分。それがこの「ものぐるほし」という語で表されているのである。兼好自身にも思いをはせながら、自由に読み味わわせてみたい。